

ライプニッツは身体をどのように捉えていたのか

初期の医学・生理学草稿から

寺嶋雅彦(早稲田大学、日本学術振興会)

本発表の目的は、G.W.ライプニッツ(1646-1716)は「身体」をどのように捉えていたのか、医学・生理学の観点から、初期の思索に即して明らかにすること、である。さらに具体的な目的を与えるならば、ライプニッツは、初期の思索において、身体の構造、身体内における流れ(循環器系、呼吸器系、消化器系など)、身体内における薬の作用をどのように考えていたのか、を明らかにすることである。以下では主に本発表の背景説明を行いつつ、最後に本発表が有する意義を提示する。

ライプニッツが生きた17世紀近代西欧世界では16世紀に引き続き医学・生理学上、大きな発展があった。ところが、それはあくまで、同時代の医学者・生理学者にとって意味のある事であって、いわゆる「哲学者」であるライプニッツには関係のない事なのではないか?と思われるかもしれない。しかし、そうではない。ライプニッツ及びライプニッツと同時代の「哲学者」たちにとって、医学・生理学は主要な関心事であった。例えば、今日からするとハーヴェーは血液循環説を提唱した医学者・生理学者として、デカルトは方法的懐疑を提唱した哲学者として位置付けられるが、それは後の受容史によって定められたことであるにすぎない。「もし我々が、ハーヴェーやデカルトを彼ら自身の複雑な経歴に適した仕方で理解したいならば、我々が今日形成している哲学者と自然科学との強固な区別を捨て去るのが賢明である」[1]。すでに知られているところでは、デカルトは、地元の肉屋で廃棄される部分、例えば目などを収集して、念入りの研究を行っており、また、ロックは、1674年に『呼吸の使用について』という学位論文を提出している[2]。では、ライプニッツは医学・生理学とどのように関わったのであろうか。

まずは1次文献をめぐる状況から確認する。「自然科学、医学、技術著作」を対象とするアカデミー版ライプニッツ全集第8系列は、第1巻(対象年:1668-76)が2009年に刊行され、第2巻(対象年:1668-76)、3巻(対象年1677-未定)は先行してオンライン版が公開されている。2016年11月現在で公開されている第2巻は校訂者によるVorwort、Einleitung、Verzeichnisがないことを除けばほぼ完成しており、とりわけ解剖学、植物学、医学、化学の項目は校訂注がすでに付されている。一方で第3巻はまだ校訂の途上であり、断片的な情報しか含まれていない。医学・生理学に関連する領域としては、「政治著作集」を対象とする第4系列で、第5巻658-667ページ、第6巻567-603ページに、衛生保健政策を扱う論考がすでに刊行されている。

以上のアカデミー版刊行、公開状況からすると、ライプニッツが直接的に医学・生理学の内実について言及している1次文献は、76年以前に記された初期の思索しか触れることができないように思われる。ところが、事態はそう単純ではない。もっぱら医学・生理学を対象とする著作・書簡以外でもライプニッツの医学・生理学思想を取り出すことは可能であり、また、アカデミー版以外の版ですでに医学・生理学を対象とする著作・書簡が刊行されているものもある。さらに一定数の研究者がアカデミー版刊行以前にマニュスクリプトを独自に読み取り、各国語訳、研究がわずかながらもなされている。

そこで次に2次文献をめぐる状況を確認する。専門的にライプニッツの医学・生理学に取り組んでいる研究者として、特に

Duchesneau、Andrault、Smithを挙げることができる。Duchesneau、Andraultは中期以降に記された『アルノーとの往復書簡』、『ハルトゼーカーとの往復書簡』、『シュタールとの往復書簡』、『ベルヌーイとの往復書簡』などのテキストを解釈の中心的な対象に据え、ライプニッツの生理学を再構成している[3][4]。一方でSmithは、初期から晩年にかけて概括的にライプニッツの医学・生理学を再構成している。注目すべきは、晩年になされるシュタールとの往復書簡において、シュタールは、身体における生理的な作用を魂による作用として捉えることを提示しているのに対し、ライプニッツは身体における生理的な作用は機械的であると主張しており、ライプニッツのこのような発想は1670年代にまで遡ることができる指摘する点である[5]。

本発表はこれらの先行研究に多くを負いながらも、その課題を解消する試みである。その課題とは、ライプニッツの医学・生理学に関して、特にその最初期に関してはほとんど研究がなされていない点である。初期の思索を扱っているSmithであってもあくまで概括的に初期を扱っているにすぎず、「この期間[パリ着]からのライプニッツの医学的ノートは、その網羅的な研究をここで与え始めるにはあまりに多すぎる」として、マインツ期では、『医事に関する諸指示について』、パリ期では『痛風と憂鬱症に関する1676年1月25日のノート』のみを扱っている[6]。したがって、ライプニッツは1670年代においても、身体内における生理的な作用を機械的であると捉えていたのか否か、つまりSmithの主張が妥当であるのか否か、初期草稿を網羅的に調査することによって明らかにすることができる。これはライプニッツが初期の思索において、身体をどのように捉えていたのかというより大きな視点を解明することにもつながるであろう。

上述した背景に基づいて遂行される本発表の有する意義は、主に二つある。第一に、ライプニッツは初期の思索においてすでに予定調和の発想を有していたのか否かを、これまでの形而上学に即した研究とは別の仕方で示すことができる点にある。というのも、もし仮にシュタールが考えたように、魂が身体に作用をもたらすとすると、心身が互いに独立しつつ整合的な対応関係を有するという予定調和に反してしまうからである。

第二に、初期近代西欧世界における医学・生理学思想史の一断片を復元しうる点である。というのも、初期の医学・生理学草稿にはライプニッツが同時代の知識人から聞いたメモ書きが含まれているため、その草稿を通じて、同時代の医学・生理学的な知を再構成することができるからである。これによって通時的にはパラケルスス、ヴェサリウス、ハラールなどの医学・生理学思想と、また、共時的にはハーヴェー、デカルト、ロックなどの医学・生理学思想と比較検討する立脚点を提示することが可能になるであろう。

参考文献

- [1] Duchesneau François and Justin E. H. Smith(trans.). *The Leibniz-Stahl Controversy*. (New heaven: Yale University Press, 2016), xv.
- [2] Ibid., xiv.
- [3] Duchesneau François. *Leibniz: le vivant et l'organisme*. (Paris: VRIN, 2010), 121-188.
- [4] Andrault Rapaële. *La vie selon la raison: Physiologie et métaphysique chez Spinoza et Leibniz*. (Paris: Hanoré Champion, 2014), 91-150.
- [5] Justin E. H. Smith. *Divine Machines: Leibniz and the Sciences of Life*. (Princeton: Princeton University Press, 2011), 39.
- [6] Ibid., 33-39.